生徒を見取って授業をデザイン
教科でキャリア教育
札幌英藍高校（北海道・道立）
第33回
美術

取材・文／松井大助
撮影／川原 亮

美術“を”学ぶから、美術“で”学ぶへ
美術を通して生徒の考える力や自己理解も深める

美術の授業で、絵や彫刻や色彩で表現する楽しさはもちろん届けたい。ただ、生徒たちは美術の道だけに進むのではない。多様な進路に向かう生徒に対して、授業の学びはそれだけでいいのだろうか？　その問いと向き合った実践をご紹介します。

何をしたいか
自分で
考える力を

今号の先生

美術
八重樫（やえがし） 善照先生

大学で木材工芸を専攻し、美術と工芸の教員免許を取得。卒業後、広告代理店や劇場職員を経て、北海道の教員に。2010年より、北海道高等学校教育課程改善会議構成員も務め、教員研修や教育研究大会の講師などを通して、道内の高校美術・工芸教育の充実も進めている。

生徒に対する想い

答えのないものに対して自分の答えを見出せるように

八重樫 善照先生がかつて勤務した学校では、生徒が大学進学を目指して懸命に勉強をしていた。その努力は称賛に値したが、やみくもに勉強して疲弊したり、さまざまな要因から保健室登校になる生徒もいて、「大人の言うことを純粋に受け入れすぎる」という危うさも感じたという。

一方で、今いる北海道札幌英藍高校では、生徒たちが進学から就職まで多様な進路選択をすることもあり、例えば教員が勉強を促しても、表面的には従いつつ自分が必要性を感じなければ受け流す、といった「わりとたくましい一面をもっている」と感じている。ただ、では本当に自分のやりたいことを選んでいるかというと、その点では少し疑問がある。

「これまでに何かに懸命に取り組んできたというよりは『そこそこがんばってきました』という生徒が多く、自分の本来もっている力に気づかずにきた生徒が多いと感じているのです。私も中学生の時はまさにそのタイプだったので気持ちはわかるのですが、『もうちょっと欲をもっていいのにな』と思うんですよね。自分のやりたいことをしているというよりも、まわりに合わせて〝安易な選択〟をしている、と感じる部分があります」

だから、これまでと今の高校では生徒のタイプは違うが、共通して「こうなってほしい」と思い描いてきたことがある。

「これという答えのないものに直面して判断を迫られたとき、どうしたいかを自分で考えて『自分なりの答え』を見出す力を身に付けてほしいと思っています」

授業の実践

〝自分〟や〝社会〟をテーマに生徒が作品を構想して表現する

「自分なりの答え」を見出す力がつくように、八重樫先生の美術の授業では、生徒がただ絵画や彫刻を制作するのではなく、前段階として「どんな作品にするのか」を自己と向き合って〝構想する時間〟をたっぷり取っている。また、制作途中や完成後に〝作品を振り返る時間〟や、生徒同士で作品の意図も含めて発表・鑑賞し合い、〝他者の意見を聴く時間〟も設けている。振り返りや他者の意見を通して、自分の考えをさらに深めるためだ。

そんな構想・制作・振り返りからなる創作活動を、「美術Ⅰ・Ⅱ」の授業ではさらにメインテーマも設けて行っている。

1年生の科目「美術Ⅰ」の授業で、生徒が向き合うテーマは〝自分〟だ。

彫刻の単元では、石を彫って磨いて「自分のこころ」を表現することに挑戦した。まずはワークシートを使い、おのおのが「自分のこころ」を捉え直す。ワークシートにはもやもやなど擬態語・擬音語が並んでいて、生徒は自分の状態に近いものを選んで

いく。次いでその状態をどんな形で表現するか考え、作品制作へ。

完成すると、八重樫先生より「この作品が立派な彫刻としてどこかに飾られることになったら、どんなタイトルと説明をつける？」と新たなお題が。生徒は自らの作品と再び向き合った。最初の構想を言葉にした生徒もいれば、制作中になかなか思い通りの形にならない石と格闘し、自然にできた形から感じ取った自分の一面を言葉にした生徒もいたという。

絵画の単元では、「未来を見つめる自分」というテーマで油絵の自画像にチャレンジ。構想段階ではマンダラート（左の画像参照）を使い、生徒が自分の未来のイメージを広げた。そのイメージを背景に入れて自画像を描く、という寸法だ。制作途中、水彩画の下絵を描いた段階で、グループでお互いの作品を見せ合い、他者の意見を聴いて自分の考えや表現を見直すというワークも行った。

2年生の科目「美術Ⅱ」の授業で、生徒が向き合うテーマは〝社会〟だ。

造形の単元では、箱の中に立体の作品を表現するBOX ARTに、「店舗のデザイン」というテーマで取り組んだ。

洋服屋でも飲食店でもライブハウスでもいい。自分のお店を開業するならどんな店舗にするか。「銀行から開業資金を借りるために事業計画書から作成しよう」という設定で、生徒がお店の経営理念や顧客ターゲット、サービスを考えるところからスタート。その事業計画書を踏まえて、店舗のデザイン画を描き、次いで箱の中の立体作品を仕上げていった。

振り返りでは、「その店舗では、お客さまとどんなやり取りがされる？」というお題で、各自がシナリオづくりに挑戦。自分の創作したお店が、社会の中でどう受け止められそうかを改めて考えた。

他教科と連携した授業で美術の視点を多分野に生かす

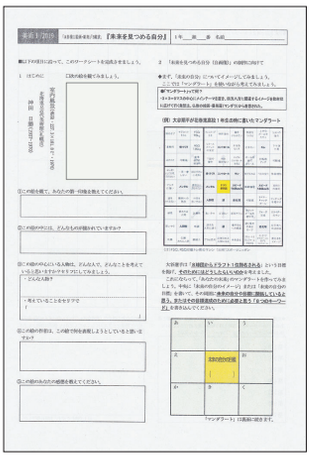
3年生の科目「色彩に親しむ」の授業では、他教科と連携した創作も行った。まずは「高校3年間で大事にしてきたこと」あるいは「この3年で大事だと気づいたこと」を砂絵で表現。その後、制作した砂絵を挿絵とする「私小説を書く」ことも、振り返りの一環で行ったのだ。

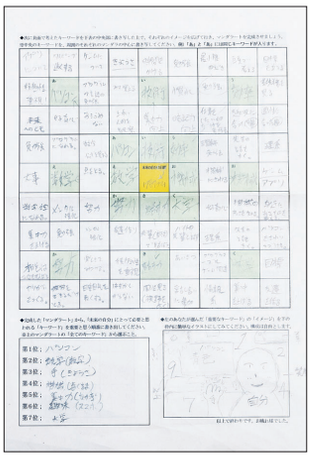
起承転結の運び方など、私小説を書くのをサポートするためのワークシートは、国語科の山崎圭志先生に作成をお願いしたという（次ページコラムも参照）。

「今後は各教科の学びを実社会の課題解決にも生かしていく横断的教育、STEAM教育にも取り組めたらと思っています。サイエンスやテクノロジーや歴史や文学。いろいろな分野を、美術の視点を通して整えたり捉え直すと、また新たなものを生み出したり、理解を深めたりすることができると思うんですよね」

確かに、生徒は今までの授業でも「ころ」「未来」「店舗」などを美術作品で表現するなかで気づきを得ていたようだ。「社会との関わりを意識しながら、そうした美術や芸術ならではの感性や想像力も伸ばしていきたいと思っています」

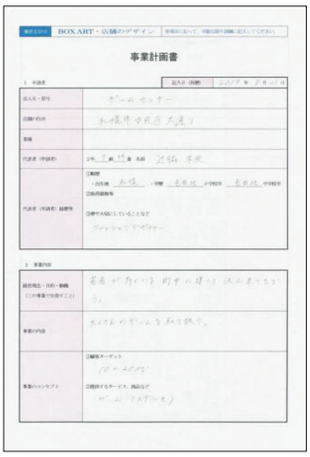
■ 美術Ⅰ（1年生）『未来を見つめる自分』のワークシート

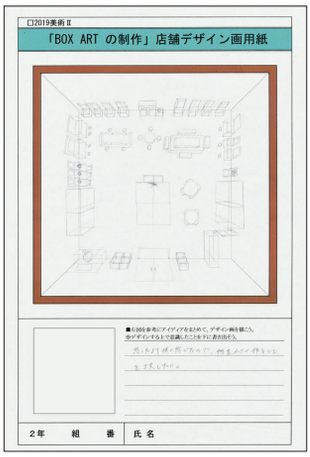




まずは画家の神田日勝の自画像を鑑賞。その後、メジャーリーガーの大谷翔平選手が高校生の時に書いたマンダラートの例も参考にして、「未来の自分」のマンダラートを作成。

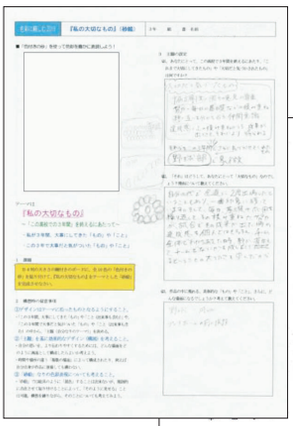
■ 美術Ⅱ（2年生）BOX ART・店舗のデザインのワークシート

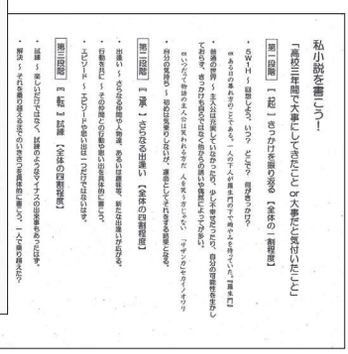




開業してみたいお店のイメージを「経営理念」「事業の内容」「顧客ターゲット」「デザインで工夫すること」などとまずは言葉に落とし込み、それを踏まえてデザイン画を作成。

■ 色彩に親しむ（3年生）『私の大切なもの』のワークシート





左は、「大切なものは何か」「その大切なものを『こと』『もの』で表すなら」などを考える砂絵制作の構想用シート。右は、大切なものを題材に私小説を書くための構想用シート。

■ 札幌英藍高校（北海道・道立）

School Data

普通科／2013年創立
生徒数（2019年度）　955人（男子442人・女子513人）
進路状況（2018年度）
大学139人・短大35人・専門学校
各種学校106人・就職17人・その他19人
〒002-8053　札幌市北区篠路町篠路372番地67
TEL 011-771-2004
URL http://www.eiai.hokkaido-c.ed.jp

Outline

札幌市北区に初めて設置された全日制普通科単位制高校。札幌拓北高校と札幌篠路高校が再編統合し、創立された。校訓は「立志錬磨・自主自律・右文左武」。目指す学校像は「社会人基礎力を育み第一志望を実現する文武両道の単位制高校」。「AIには　まねのできない、英藍生に」というスローガンも掲げ、予測不能の未来社会でもたくましく人生を切り拓いていくことができるような人財の育成を目指している。

INTERVIEW

教科の枠を超えて 生徒の想像力、表現力を磨く

国語科
山崎圭志先生

八重樫先生は美術の授業で、「習ったことを再生する」のではなく、一人ひとりが「想像力を働かせて表現する」という取組をされています。記憶の再生ではいずれAIが人間を上回るはずで、想像力は今後ますます重要になると思うんですね。しかも想像力をもって生み出した絵や彫刻を、教員が評価して終わるのではなく、生徒自身が整理・分析し、別の表現をしてみるという探究的アプローチもされています。国語の教員として私も関わった「生徒が砂絵を制作し、その作品を挿絵とする私小説にも挑む」という授業のように。そこがまたすばらしいと思うのです。

私自身、他教科とのコラボが好きで、これまでに音楽科や英語科、地歴公民科の先生とご一緒してきました。八重樫先生とも「あれ面白いね」「実はこんなことも考えていて」「そこは国語科で担えるよ」と会話するうちに今回の授業が生まれました。今後も連携を深め、言語をイメージに、イメージを言語にするような取組を広げていけたらと思っています。

HINT&TIPS

1 答えのない美術の授業で、生徒に自分なりの構想や表現を求める

年度当初に生徒には「美術は『答えのない教科』だ」と言及。どんな作品にするか構想を練ることも、そのイメージをどう形にするか表現することも一つの正解はなく、「答えは自分の中にある」と伝える。その意味を生徒全員がすぐ理解できるわけではないが、年間の活動を通して実感してもらうことを目指す。

2 初回から生徒の実態把握に努め アドリブを辞さずに授業を組み立てる

初回の授業では「中学校の美術ではどんなことをしたか」というアンケートも実施。その実態を踏まえ授業内容を調整する。また、昨年や前回までの反省を踏まえ試行錯誤も加えるので（例えば自画像のマンダラートは昨年から導入）、八重樫先生の授業は緻密なようで、実はアドリブによるライブ感を大事にしている。

3 教員自身の勉強や試行錯誤を通して 遊びのある創作活動や振り返りを行う

作品の構想や振り返りを、毎回同じ手順で行ったら味気がなく、やらされ感が強まりかねない。八重樫先生は手を変え品を変え、遊びのある創作や振り返りを行おうとしている。そのために、芸術家の取組から学び、全国の美術関係者が多く集まる「美術による学び研究会」にも参加し、授業でも試行錯誤を続けている。

4 目の前の生徒に関連しやすい題材を 授業の学習活動に取り入れる

北海道出身の彫刻家、安田侃の「こころを彫る授業」の取組を本人の了承も得て授業で行い、自画像の授業では北海道で活躍した画家、神田日勝の自画像の鑑賞から入るなど、生徒が接点を感じやすい題材を活用。その作家の作品がある近隣施設に生徒が足を運ぶなど、芸術への関心が高まることも期待している。

授業ができるまで

教員からの受け売りではなく 自分の表現をできるように

八重樫先生は、子どもの頃はあまり勉強せず、大学に行く気もなかったという。

けれども、進学した高校に情熱的な先生がいて、乗せられる形で勉強したら成績が伸び、そこから「欲が出て」、美術専攻で教育大学に進むことができたという。

大学卒業後は、教員採用試験を受けるも叶わず、一度は広告代理店に就職。そこから劇場職員を経て教員になった。

新任時代から意識してきたことがある。

「生徒の作品に自分の影が見えるようなことはしたくないな、と思っていました」

例えばある学校では、絵画展で毎年賞を取るような生徒が現れるのだが、画風はいつも似ていて、その学校の美術の先生が転勤すると、今度は異動先から同じような絵が出てくることがあるという。

「技術的なことは生徒から問われれば助言しますが、それよりも生徒に自分なりの表現を見つけてほしいんですよね」

だから八重樫先生は、生徒が自由に作品制作できることを重視してきた。だが、そのやり方ではまだ「学びとしての視点が抜けていた」ということにのちに気づく。

表現だけを磨くのではなく 構想する力も鍛える授業に

きっかけは、2010年より、道内の美術・工芸の教育課程改善の仕事に携わったことだ。文部科学省から学習指導要領や授業改善に関する説明を聞き、その内容を道内の先生にも研修で伝える役目を担ったのだが、そのなかで、自分の授業も省みることになったという。

「学習指導要領には『見て感じ取ったことや考えたこと』や『目的や機能』を踏まえて主題を生成し、発想や構想したことを基に表現方法を工夫しながら主題を追求する、とあります。例えば自画像の授業は『自画像の描き方』だけ学べれば良いのか。『どんな自分を描くか』を構想するところから始めれば、生徒は自己と向き合う経験をし、その描きたいことを実現するにはどういう構図にしてどんな技法を使えばいいか、という表現の仕方も自分で考えるようになり、より多くのことを学べます。自画像をただ自由に描かせる授業では、やる意味を示さずに『やらせている』に等しかったと痛感したのです」

今では生徒にも意識的に伝えている。

「美術の授業では、絵がうまいとか、表現の技術だけを評価するわけではないよ。どんな作品を創るのか、発想を広げることや構想を練ることも大事にしよう」と。

「未来を見つめる自分」をテーマにした油絵の自画像では、下絵として水彩画から制作。その下絵がある程度完成した時点で、グループでお互いの作品を見せ合った。

自画像の下絵を見せ合う授業ではワークシートも活用。「自分」や「未来」の表現について、および作品全体について、他の生徒から意見をもらい、改善点を考えた。

生徒はこう変わる

創作や鑑賞を通して自分や未来を見つめるように

「美術Ⅰ」の授業で『自分のこころ』を表現した石彫作品。生徒が自らつけたタイトルと説明文を読むと、普段はあまり表に出さないであろうことまで言葉にしていて驚かされた。ある生徒は作品に『不完全』というタイトルをつけ、「何もかも中途半端で何かを成し遂げることができず、見た目は完璧に見えても中身は不完全なところ」を表現したと書き添えた。生徒同士の鑑賞会では「少し照れくさかったけど、そういうのが形になったんだと感じてもらえた」という。作品名を『もやもや』として、「ぱっとしない性格を表現した」という生徒は、鑑賞会で見聞きした友人の作品の魅力も語ってくれた。

「石の上がゴールで、そこにたどりつく階段が2つ作られていて、段数が多いほうは一段の壁が低く、段数が少ないほうは壁が高いんです。だから『ゴールにたどりつけるよう、多くの目標をもって一段一段壁を越えたい』って。すごいと思いました」

『未来を見つめる自分』の自画像制作では、近い将来や遠い将来を各自が具体的なモノや比喩表現で表し、バラエティに富んだ作品が揃った。背景にパソコンやカルテやお花を描き、「医療事務の仕事がしたい」という夢を抱く自分を表現した生徒。背景に瞳や口を描き、「まわりをよく見て、約束を守る人間になりたい」という未来を示した生徒。そうしたさまざまな作品を鑑賞し合うことで、生徒が自分や未来についてさらに考えを深めてくれることを八重樫先生は期待している。

もっとも、美術の授業で構想や振り返りに力を入れるとなれば、その分、年間で絵を描いたり彫刻をしたりする時間は削られる。自画像の授業でも、絵を描いている時の生徒はとても楽しそうだったが、そうした制作時間が減ることにジレンマを感じることはないだろうか。

「美術の道に進みたくて絵の練習をしたい子が集まった場なら、やり方を変えるかもしれません。ですが、本校の生徒は多様な進路に進みます。だからこそ、生徒がさまざまな世界で活躍できるよう、『美術〝を〟学ぶ』だけでなく、考える力や自己理解のようなことも『美術〝で〟学ぶ』ことができる授業にむしろしたいのです。目の前の生徒たちは、美術を通して何を学ぶことが求められているのか。その視点から授業を考えたいと思っています」

INTERVIEW

想像を掻き立てられる授業で柔らかく考えられるようになった

2年生
池川愛夏さん

中学校の時の美術の授業は、与えられた課題に取り組むだけでしたけれど、八重樫先生の授業は、自分たちで考える時間もたくさんあって、想像を掻き立てられるところがいいなあ、と思っています。例えば芸術家の作品について、制作中の様子から映像で見て「なんでこうしたんだろう？」ということをみんなで考えてシェアしたり。自分で創る作品についても、「こころ」や「未来」のように「どう表現すればいい？」と考えるところから始めるテーマに挑戦し、できた作品に対してまたみんなから意見をもらったり。

前よりも制作する時に構図や表現の仕方をよく考えるようになりましたし、みんなの意見を聴くなかで「そういう考えもあるんだな」と知れたこともありました。物ごとを柔らかく考えられるようになったかなあ、と思います。

石彫の『自分のこころ』。不完全さやもろさや表現した作品や、「芯をもつ」「ゆったりしていたい」などありたい状態を表現した作品など、さまざまなこころの状態が形づくられた。

『未来を見つめる自分』の自画像。進学や就職や留学といった進路から、「笑顔がいっぱい」「お金持ち」などの願望まで、作品によってさまざまな未来のイメージが描かれている。

思い描いている授業の在り方

目指す生徒像

- 答えのない課題に対して、自分で考えて自分なりの答えを見出すことができる
- 見て感じて考えて表現するという美術の活動を通して、自分や社会に対する理解も深めようとしている
- 自分の「思い」を「かたち」にする力を、他者との対話なども通して、自身の試行錯誤で身に付ける

美術の授業

美術“で”学ぶ	・どのように構想や表現をするかという答えのない課題を、生徒が考え、自分なりの答えを見出す ・創作する作品のテーマを通して、“自分”や“社会”のことについても理解を深める
美術“を”学ぶ	・どんな作品を創りたいか生徒が構想を練り、そのねらいを実現するにはどんな構図や技法がマッチするかも考え、美術の発想力や表現力を磨く ・鑑賞を通じて作者の意図や技法について理解を深める

他の教育活動や社会とのつながり

- 国語科と連携した授業など、さまざまな分野に美術の視点を組み合わせて、新たな創造をすることも模索中
- 地元の芸術家の題材を授業に活用（生徒にとってなじみやすくし、興味をもてば自分でも探究しやすいように）